
Crimson Rapunzel

糸雨 冷

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

C r i m s o n R a p u n z e l

【Nコード】

N 1 7 0 6 B A

【作者名】

糸雨 冷

【あらすじ】

高い塔の上。

紅い、長い髪。

過ぎ去った春は・・・まだ来ない。

*サイト掲載済

C r i m s o n R a p u n z e l

タンタンタン

軽い足音が響く。

その足音は私が足を止めない限り続くもので、まだまだ続くこの階段を見る限り、足音は当分響き続けるだろう。

あれからいくらか上っていくと・・・やっと階段の終わりが見えてきた。

階段の上の踊り場に、部屋へ入るための扉がある。

彼が好きな、白い色をした扉。

小さな音を立ててその扉を開けると、窓際の椅子に座っていた彼がこちらを見る。

紅い髪、紅い瞳、以前とは違いすっかり笑わなくなってしまった今でさえ誰よりも綺麗で、優しい人。

「こんにちは、雛菊君。」

だけど入ってきたのが私だとわかると、彼はすぐに視線を窓の外に戻す。

彼は閉ざされたここですっと一人の女性を待っているから。

それは私ではない別の女性で、彼と私、そして彼女は3人で時を過ごしたことがない。

だから彼は、私を見ない。

近頃の彼は、私と2人の時は何もしゃべらない。

独り言すら言わない。

私の存在を記憶から消してしまったからか、それとも話したくないからか。

理由ははっきりとしないけれど、それでも彼はここに住み始めて数年、確かに彼女以外のものをだんだん忘れていつている。

そして彼女と共に彼と時を過ごした私の存在は、彼の中から掻き消えていた。

今彼の中に残っているのは、彼の前で彼女と並んだことのある人だけ。

「ヒナ君？」

小さく扉が開く音がして、澄んだ声が彼を呼ぶ。

紅い髪、紅い瞳、彼が愛した彼女に瓜二つの顔立ちの……彼女の妹。

少しだけ……無表情としか言いようのなかった彼の表情が変わり、僅かに……その端正な顔がほころぶ。

そしてゆらり、ゆっくりとした動作で立ち上がる。

「いらっしゃい、くう。」

さらに、彼と同じ色合いの髪を揺らし、くうと呼ばれた女性は彼に近づく。

ため息を吐いて、手に持っていたお盆を手渡す彼女は紅姫くれひと言う名前の……彼の幼馴染。

記憶の中の彼女と同じ顔立ちで、なおかつとてもよく似た声をしているが……それでも彼は、彼女と紅姫さんの声を間違えたりなんてしない。

「『いらつしやい、くう。』じゃないわよ。食事くらい自分で取りに来てって何度言ったらわかるの？」

眉間に皺を寄せて、紅姫さんは彼を見る。

そんな紅姫さんを彼は申し訳なさそうに見やる。

「今日は、いらないかと思って。」

彼は、あまり食事をとろうとしない。

今日みたいに紅姫さんが持ってきたら食べているみたいだけど、自分からはあまり食事をしない。

まるで生きることを、放棄しているみたいに。

「ねえ、くう……。いつになったら、春は来るのかな？」

ただそれだけを呟いて、彼はまた窓の外を見つめる。

いくら窓の外を見つめても、彼の瞳に正しい季節が映ることは無い。

彼はずっと、終わらない冬の中にいる。

今が桜の咲き誇る春であっても、彼はずっと春を待っている。

彼女と約束した……。10年以上も前に過ぎた彼が19になるあの春の日を。

『ねえ、約束しよう。ヒナの19の誕生日にここで2人で……。お花見をするって。』

その約束だけを残し、彼女は彼の前から姿を消した。

彼女が彼の隣にいなかった数年の間に私は彼女に出会った。

まばゆい白銀の髪と海のように澄んだ青の瞳を持つ、誰よりも気高く綺麗な人。

そして彼女は、10年以上も前の約束の春の日に、彼をかばって・
・彼の目の前で死んでしまった。

「いつになったら春になるんだろう。春にならないと　に逢えないのに。」

彼は窓の外を見つめ、切ない声で呟いた。

窓の外にある淡い桜色の花も、彼と同じ名前を持つ紅い花も彼の目には映らない。

紅い花の咲き誇るそこは彼が幼いころ、私が生まれるより前に彼女に出逢った場所。

彼と同じ名前の花が咲き誇るその場所で雛菊君と彼女は出逢い、その瞬間・・・恋に堕ちた。

ずるい、ずるいよ。

雛菊君は私が生まれるより前から彼女が好きで、

彼女も私が生まれるより前から雛菊君が好きだった。

雛菊君と彼女は、私が生まれる前からずっと両思いだったんだ。

「六花ちゃん。」

名前を呼ばれて振り返ると扉の前にたった紅姫さんが私を見ていた。紅姫さんと私がここで鉢合わせたとき、紅姫さんは自分がここを出るとき、私も一緒に帰ろうと誘う。

じゃないと私はここから動こうとせず、ずっとここにいてしまおうら。

紅姫さんは私の気持ちを知っている。

だけど紅姫さんは雛菊君を愛するまま若き生涯を終えてしまった彼女だけを、雛菊君にずっと愛していて欲しいと願っているから。

そのために、私が雛菊君がいるこの場所に、彼と同じように閉じこもってしまわないように。

亡くなった彼女が・・・彼に自分のことを忘れて、明るい人生を歩んで欲しいと願っていると気づいていても。

「はい、わかっています。」

私は扉の前まで歩いていき、扉を出る前に窓際の椅子に座る彼のほうを振り返る。

窓から入る春の柔らかな風が彼の紅い髪を揺らしている。

「また・・・来るね、雛菊君。」

くうのほかにも、もう一人誰かいた気がした。ただ俺に、それが誰かなんてわからない。その誰かは、俺のことを『雛菊君』と呼んでいた気がした。それがわかった時点で俺はそれが誰であるか考えることを放棄した。雛菊、と言うのは俺の名前だけれど・・・彼女はそんな風に俺を呼ばないから。

小さな音を立てて窓を開ける。窓の外にひろがるは無彩色の世界。彼女が、いない世界。

「もうすぐ・・・君のところに行くから、待っていて。」

小さな恋の灯火は、あの日白銀の髪を持つ彼女の背に紅い花を咲かせ消えてしまった。

あの紅は花だったのか、幻だったのか・・・当たり前前に考えてみるとそれは死にゆく彼女が流した血の紅さでしかなくて。

その瞬間、俺は自分が持つこの紅い色をひどく嫌悪した。

『紅の花の君』

遠い昔、彼女がまだこの世界にいた頃、俺はそう呼ばれていた。紅い髪と瞳・・・花の名前を持つと言う意味で。

ただど今は、『Crimson Rapunzel』と呼ばれるらしい。
高い塔の上、一人外の世界とは決別して彼女の迎えだけを待っている。

Crimson Rapunzel、それは紅の髪長姫。

待ちわびるのは白銀の色。

眠るのが怖くなる理由

「ねえ、杏奈は『眠るのが怖くなったこと』ってある？」

私の問いかけに隣で本を読んでいた杏奈は顔を上げる。

彼のすらりとした指が、ページを捲ろうとしたまま動きを止める。

「何ですか、それ？」

何と問われても文字通り、言葉の通りのことである。

そして、私は私自身にその問いをしたら、答えは”NO”である。

「あのね、眠るのが怖いって言ったのよ。

そして、それには理由があるのよ。」

「だから、何なんですか？ いったい誰が言ってたんです？」

そう言って杏奈は訝しげに私を見やる。

紅い髪、紅い瞳・・・私や彼も含め、多くの人がこの色を持つ。

「・・・・・・さん、紅姫さん？」

「えっ・・・・？」

はたと気づくと不思議そうに杏奈が私を見てる。

その紅い瞳は”彼”を思い出させる。

高い高い塔の上。

遠い昔に過ぎ去った春を、ただただ待ち続ける人。

「え、じゃ無くて奇妙な問いかけをしたまま黙り込まないでください。」

不満そうな顔をして杏奈は私を見やる。

こういうときだけ、普段大人っぽい彼が年下であることを再認識する。

・・・とは言っても私も彼もいい年した大人なのだけ。

「ああ、ごめんなさい。昔お姉ちゃんが言っていたのよ、『眠るのが怖い』って。」

意地っ張りで強がり、人に頼ることが苦手だった私のお姉ちゃん。遠い昔にヒナ君と、叶うことのなかった桜の下での再会を約束した人。

「彼女って・・・時々小難しいと言いますよね。『眠るのが怖くなる理由』ですか・・・。」

そう呟いて、杏奈は考え込む。

杏奈は六花ちゃんりっかの幼馴染で、お姉ちゃんとも顔見知りだ。

そしてその質問をされたとき、私にはまったくわからなかった。だけど杏奈なら、その答えがわかる気がする。

「その答え、紅姫さんにはわかったんですか？」

「わからなかったわ。だからお姉ちゃんに答えを教えてもらったの。」

にっこり笑って私が言うと、杏奈は再び悩みだす。
紅い髪、紅い瞳、中性的な美貌を持つヒナ君とは違う男らしい……
だけど綺麗な杏奈の顔。

「杏奈って……今いくつだったっけ。」

お姉ちゃんが亡くなって10年以上。

彼女の時は18だったあの日に止まってしまったけれど、生きている私たちは年を重ね続けている。

私、お姉ちゃん、ヒナ君。

3人は同じ年に生まれた幼馴染だったけど、お姉ちゃんは18でその時を止めた。

そしてヒナ君は、お姉ちゃんと一緒に心の時を止めた。

私だけ……年をとり続けている気になってしまう。

お姉ちゃんだけを愛し続けて心ときまで留めてしまったヒナ君を愛する六花ちゃん。

彼女と杏奈は同じ年で私たちよりも若いけど、それでも何年も前にお姉ちゃんの年をぬかした。

そっくりの顔立ち、まったく違う髪と瞳の色。

私とお姉ちゃんは誕生日こそ1日違うがそれでも確かに双子だった。

「年ですか？この間27になりましたけど。

そんなことより紅姫さん、ヒントください、ヒント。」

そう催促する杏奈を見ると彼と初めてあったときを思い出し、少しだけ懐かしい気分になった。

あの時幼かった杏奈ももう27になり、杏奈との結婚生活ももう5年目、私も30を過ぎた。

「ヒントね・・・逆のことなら大半の人が思ったことあると思うわ？」

「逆のこと？つまり『眠るのが怖くなくなる理由』ってことですよね？

俺には余計意味がわからないんですが。」

「あら、そう？でもその答えはとても単純で、納得できることよ。」
そしてみんな、そうなりたいと願っている。

「納得・・・できるんですか？」

あ、もしかしてそれって彼女特有の変に後ろ向きな話ですか？」

「後ろ向き・・・と言うかそんな感じね。
どっちかと言うと仮定に近いかな。」

私の言葉に杏奈は答えがわかったのか、くすくす笑い出す。

お姉ちゃん性格を知っていて、なおかつ勘のいい杏奈ならわかる気がしていた。

「紅姫さんは今、『眠るのが怖い』ですか？」

綺麗な笑みで、杏奈は問う。

そして私も、笑みを浮かべて答えを返す。

「今はまだ『怖くない』わ。」

でもこの子が産まれたら、『怖くなる』かもしれない。」

そう言っつて私はお腹のふくらみを撫でる。

ここには、もうすぐ産まれる私と杏奈の子供がいる。

「わかりましたよ、紅姫さん。」

『眠るのが怖くなる理由』は、『幸せだから』ですね。」

優しく笑って杏奈が言った答えに、私は幸せそうに笑い返した。

『あのね、紅姫。私が眠るのが怖い理由はね、今がとても幸せだから』

らなの。

眠って目が覚めたあとに・・・もしも今のヒナの隣にいられる幸せが夢と一緒に無色になりえたら・・・私は怖い。
だから私は、眠るのが怖くてたまらない。』

幸せだから。

今の自分が幸せだと、何よりも実感できるから。

・・・だから私は怖いのです。

夢から醒めて、この幸せが無色に消えてしまったら・・・。
そう考えると私は眠ることすら怖くなる。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1706ba/>

Crimson Rapunzel

2012年1月4日11時48分発行